

浄土

六月号



法然上人鑽仰会



昭和十一年五月廿一日 第三種郵便物認可 (毎月一回)
昭和二十二年四月二十八日 運輸省「特別扱」承認
昭和四十一年五月二十五日 印刷 昭和四十年

須菩提像

興福寺藏

興福寺の十大弟子は今では六軀を残すのみとなったが、私はいつも深い感動を覚える。須菩提の姿は、はりがありながらも、それでいて柔らかな線をえがきつつ、調和のとれた緊張感にみずみずしいほどに溢れている。ほのぼのとした温和な顔に法悦をたたえていると言いかえてもよい。天平彫刻は静かな内面的ほり下げを好みながら、そこからにじみでてくる人間性が心をうつ。

須菩提は長者の子として生まれ、仏陀に帰依したが、おそろく多くの煩悶に身をさいなまれた結果であろう。修行そのものも、須菩提に苦しみと悩みを生じさせたこともあるだろう。しかし、その苦悩を超克したとき、苦しみや悩みのなかにありながらも、苦しみや悩みにとらわれない、たんたんとした境地が生まれてきたことでもあらう。

そのときの、憂えを心にひめ、あらゆるものと超然としている須菩提。見るものの心を見すえているかのような須菩提。静かなたたずまいを見せながらも、底にひめた力強さはまさに空の世界そのものを示す須菩提。仏者の姿はまさにこのようなものである。

(石上善応)

—目次—

巻頭のことはば 檀家制度と信仰……………(1)

随 想……………峰島旭雄・佐藤百合子・小野泰博……………(2)

幸福を求める心……………奥野信太郎……………(4)

— . — . — . — . — . — . —

座談会 現代社会の動きと宗教の役割……………(7)

臨 終……………合田 微雪……………(10)

近世文名録 浜野義光氏……………高橋 良和……………(16)

一言法談 忍の徳……………渋谷 賢応……………(20)

仏教人生訓 心の受けとめ方……………宝田 正道……………(14)

浄土のこよみ……………大橋 俊雄……………(18)

祖山で実践仏教を受けて……………阿部 一成……………(22)

家康と三河一揆……………鶴田 湛泉……………(24)

創価学会手引……………(32)

編集後記……………(33)

— . — . — . — . — . — . —

日本浄土教語 隆寛の活躍と位置……………鈴木 成元……………(28)

池の水人の心ににたりけり

にこりすむことさためなければ

法然上人御歌



檀家制度と信仰

日本には徳川時代からの檀家制度が、寺院の機構の要として、今日、尚残存している。封建社会の遺制であるという批判もあるが、僧俗一体となって、祖先伝来の寺院や墳墓を護持し、信仰生活の為の強固な紐帯として、無視する事の出来ないものである。住職と檀家の人々との間には、家族的な温い繋がりがさえもある。

しかし、これ等の繋がりが、単に機構のみの繋がりであったり、人間対人間の関係にのみ止まるならば、会社や組合と何等変りが無いものとなってしまふ。少くもそれが宗教社会であるならば、信仰という紐帯が、根強く存在せねばならない。

ともすると、制度的繋がりを、信仰的繋がりと誤認し、檀家なる故に信者であると錯覚している事はないであろうか。宗教的無知や無批判さが、こうした制度に災いされて生じているとするならば、われわれは、とくと反省せねばなるまい。

檀家制度をして、真の制度たらしめる為には、太い信仰的紐帯によって維持さるべきことを、此の際僧俗ともに自省すべきであらう。

先 達

峰 島 旭 雄

(早稲田大学助教授)

「すこしのことに先達はあらまほしきことなり」という徒然草の言葉はあまりにも有名であるが、いままでの短い人生行路をふりかえってみて、わたしにも先達はあった。なかでも、先達というよりは先師である真野正順博士と佐藤賢順博士のお二方の名を逸することはできない。このお二方はわたしにとって学問研究のうえでの師であったばかりでなく、人生行路の導きの親でもあったのである。真野先生はわたしをほめてくれたことはなかった。お会いするたびに、わたしの痛いところを衝いてこられた。その鋭さはいまも心にしみている。人間二十才をこえたら人の思想の受け売りではだめだ、自分で思索しなければいけない。先生はわたしを見据えてよくこういわれた。それでもただ一度、ほめられたことがあった。君は勉強のほうは大したことはないが、小さいころからよく仏様に手を

よいよ思い知らされるのである。先生の『宗教の論理と表現』はこのような意味での比類ない労作であった。

道元は『随聞記』のなかでしばしば先師・古人の行履を尊ぶべしと述べている。わが上人もまた『選択集』で他の諸宗に伍してわが宗の師資相承を語っている。わたしはつくづく「なにごとにも先達はあらまほしきことなり」とおもうのである。

その道に生きる

佐藤百合子

(音楽家)

着物道楽の一人の友人が、いつも洋服でいる私に、もうそろそろ着物の味を味う年頃だとしきりにすすめて、ある染物屋につれて行ってくれた。目立たない構えの、着物好きの奥様方相手のこの店の女主人は、客を相手にボンボンと中々の毒舌家だが、根は親切で柄の見立て、扱う染の確かさから、不思議な魅力があつて一度足をふみ入れると、ずっと離れられなくなるということだった。

てしまうものがあつた。

「美」に憑かれた人がここにもいた。

心の小径

小 野 泰 博

(大正大学講師)

郊外のささやかな住いの廻りにも、家が立てこんできた。裏向いの家との間にも境を必要が生じてきた。万年塀を建てることを考え—こういう場合、慣習として塀の費用は相方で出し合うのがよい、という大工さんのことばに従って—「時に塀をつくりたいのですが……」という話を、裏側の家にしてみた。先方では家では「まだその必要を感じていません。お宅の方で、私の方の裏のガタガタしたものがみえて、お困りでしたらどうぞ」という返事だった。致し方なく当方だけでつくることにした。ところで、裏向いの家との間に高い塀をめぐらして完全に遮断してしまうことにあるためらいを覚えた。表の出口が別々の通りに面しているこの背中合せの隣家とのつき合いは、まずこれで切れてしま

あわせるときいている、それはよいことだ――先生はあの独特な口調でこういわれた。若かったわたしはいささかの自負をもっていたので、これをきいて心にカチンときたものがあったことは否めない。だが、四十の声を身近かにきくいまとなって、わたしは先生のこの言葉をありがたくもなつかしく味わうのである。

佐藤先生はそのようなことはなかった。温顔温容という表現がぴったりあてはまるお顔で、わたしのことをたえず見守ってくださった。若いわたしがあちこちとさまよってもじっと見守っておられ、最後にウィルヘルム・マイスターの遍歴よろしくもとの古巣へもどってくると、「それでいいのだよ」とばかり声なき声であたたかく抱擁してくださった。わたしはやはり若気のいたりで、よく先生の著書論文のアラ探しをしたものだった。しかしいつも、そのガッシリとした思想の構築にぶつかっては、はねかえされた。いま自分がいくぶんなりともひとりだちでものを書く身となって、先生の思想の建造物の偉大さがい

一月あまりして染上ったからという電話で早速出かけて行った。色といい柄といい私の好みにびったりですっかり嬉しくなって、話はずんで了った。この人は若い頃日本画を習っていたが相当打ち込んでいたのに結婚で中断し、戦争がはさまり、子供が生れ、結婚に破れ、実益を求めて人形作りをしたが、更に転じて染物屋をはじめ、外壳から、やっと五年程前に店を構える事が出来たという。絵を画く事につながっている今の仕事を心から喜んでいる。お客に逢って色々話を交している中にこの人にこんな着物を着せたいと思いつく。時にはその場で良い考えが浮ばず、夜床の中であれこれ思いめぐらすこともあるという。人それぞれに具ったものを生かしていく着物というものは、文字通り十人十色、そして人と着物とのとけあっているニュアンスは、洋服では味わえない日本人特有の繊細な感性で捉えられていくものであるという。着物というものは大変なものですと溜息をつく。着物を通して結びつく人間関係の不思議さを語っていくその表情には、思わず見とれ

う。「くぐり」をつけようと思った。万一の場合、裏をくぐって避難しなければならぬ時があるかもしれない。そんな時高い厚い壁のため出口がなく、恐ろしい結果を招かないともかぎらない。ほんとはくぐりにはドアもない方がよいかもしれない。しかしドアだけはつけることにした。出来あがったものは鍵のかかる部厚いドアで、ちょっと裏口にしては立派すぎる感じだった。

翌朝、妻は、嬉々として、このドアの合鍵を一つ先方の奥さまに手渡しに行った。これでよかったと思った。隣人との間には、ある隔りが必要だ、しかし心の通路だけはあけておきたい、そんな気持がいささか満たされたような気がした。四つになる息子は、近所の友だちの名を呼びながら、このくぐりを駆け抜けていく。このくぐりが早速役に立つ日が早くも来た。それはドロボウや火事ではなかったが、急に私のとこの井戸が枯れてしまい、「もらい水」が必要が生じたのである。裏向いの奥さまの全面的な好意にオシメ洗いのある妻はいたく恐縮してしまった。

幸福を求めゐる心 (一)

奥野 信太郎

(慶応義塾大学教授)

ファールブルの「昆虫記」という大変おもしろい本がある。

そのファールブルの「昆虫記」の中に、「人間が他の動物、犬や猫や猿や馬や羊そういうものと違う点は、人間は死ということを知っている。それであるが故にそれを悪用して、しばしば自殺などもする。」

なる程そう云われてみればそうです。どんな利口な犬、どんな利口な猫だって、奥さんが昨夜うちのミイが自殺しましたねなどという話を聞いたことはありません。ところが人間はしばしば死を知っている知識を悪用して自殺などということをする。つまり死ということを知っている知らないということが他の動物と非常に違う点であるとファールブルはいつているのである。

私はそれにもう一つつけ加えて人間が他の動物と違う点

は、人間は常に今日よりは明日、明日よりは明後日、明後日よりは遠い将来の幸福を夢見ながら生きているものである。これが他の動物と非常に違っている点ではないかと思ひます。今日よりは明日、明日よりは遠い将来だんだん落めになるのをたのしみながら生きている人はまずないと思う。少なくとも状態がよりよくなることを願ひかつそれを夢見ながら生きていく訳です。なんとかそういう一つの幸せな境地に達したいと思ひながらそれをたのしみにして、或いはそれに引きずられて生きている訳です。大なり小なり、この点が他の動物と非常に違う点だと思います。

ところがさてそんな他の動物と人間と違う点、だからして非常に重大な事なんです、それでは一体どういうものが幸わせなんだらうかと、こう開き直れますと困ってしまう。



それはこういうものですと、指し示すことができない。或いは説明することができない。本当に困ってしまう。大変曖昧なものです。だから昔から非常に幸福とは何ぞやといったような議論を多くの人々が頭を悩ませてきております。あなた方若い方の好きなものは恋愛論と幸福論だと思う。恋愛論、幸福論という若い人は非常にとびつく。あなた方もきっと幸福論の一つや二つはお読みになった方があるかも知れない。あなた方の一番若い人々に興味を持たれるアランの「幸福論」なんか、一番若い方にうけると思うんですが。アランの「幸福論」なんかお読みになった方はあるかも知れないと思う。それほど重大なものですね、幸福ということを考えることは。それほど重大な幸福の実体はこういうものと書き示すことはできません。なかなかむずかしい。何んかその辺にあるような気がする。あるような気がするけれどもそれを捕えることはできない。だから西洋では空に飛び去った青い鳥の姿に似ているといっている。鳥の姿は見えるような気はするけれども捕えたいということとはできない。はなはだ曖昧なものです。それにもかかわらずそれを追いかけているのです。今ではありません。大分まえ、即ち中共が起きる以前の中国です。あの国ではいろいろギャンブルに関係した遊戯がある。中国特に上海にまいるといろいろなものが揃っている。

今それが日本に移ってしまった感じがありますが、その上海にドッグレースというものがあつた。ドッグレースは読んで字の如く、競犬、犬の競技です。みんな犬を走らせて競馬と同じことをするんですが、このドッグレースを私見まして、その時に考えた。なにか犬の姿が人間に似ている感じがする。と申しますのは、犬が「ドン」と一発すると一緒に走り出すんですが、犬は悲しいかな、どんな利口な犬でも犬ですから走るといっても一生懸命走る、その一生懸命が違ふんですね。人間の競馬を操る騎手とは違いますね。そこで犬を走らせる場合に犬の前に兎が走る。それを犬が追いかける。但しその兎は本当の兎ではありません。電気仕掛けで走る兎です。からどんな一番速い犬よりも更に兎の方が速く走る。ですから兎を捕えることはできない。兎が走る、遂に兎を捕えることができないうちにゴールインしてしまう。

それが何か幸福というものを追いかけてながら生きていく人間の一生の姿に似ているような気がしたと考えてみますと、何か馬鹿らしい感じがしましょう。何んだか捕えることができないような幸福を追いかけてながら一生を過してしまふなんて馬鹿らしいじゃないかという考えがしますね。人間と他の動物とが大変違うという、その幸福の追究ということがそんなにも他愛ないものかしらと馬鹿々々しい感じがするかも知れ

ない。私はそれで良いと思う。追いかけて、追いかけて一貫の終りとなってもさしつかえないと思います。

ところが世の中に幸福みたいなものが沢山あるような、何か幸福というものが我々がはつきり捕えることができないにもかかわらず幸福というものは沢山ある。例えばお腹がペコペコだ。もうお腹の皮と背中が皮が付きそう。そんな時に眼前に御馳走がやってくる。お腹のへっている時は食は選ばずですから、何んでもいいんです。そんな時もやもや湯気のたつような肉万頭でも、さあ沢山食べて下さいといわれた時、喉から手が出そうだから、むしゃむしゃ食べたいと思うんだが、それは下品だから少しづつ食べていく。だんだん食べていくうちにお腹の皮がはってくる。そうすると体中に幸福感が満ち満ちてくる。ああ何にか幸せだなという感じがする。或いは又もう暮にさしかかって一体どういうことになるだろう。今年の収入は、そして支出は、今月の払いはどういうことになるだろうと計算してみた。さあ足りない。これは大変だ。十二月というのは大体収入も多いが支出も多い月です。それがとんでもない大変な赤字だ。ああどうしたらいいんだらうと四苦八苦している最中に思いもかけないお金が入ってきた。丁度三年前に人に用立てといってもうあれはかえってこないと思ってあきらめていたお金が実はその人がひょ

っこり尋ねて来て返してくれた。ああ嬉しやとそれで全て払いつくしたところまだあまっていた。収入も多いし、そこにもってきてそういう不時の収入があったのだから今年の十二月は楽に年の瀬が越せることになったんだらうと、こう思った時はどうでしょうか。やっぱり幸福感のようなものが体中に満ち満ちて来ますね。

だけれどもそういうことが本当の幸福とは考えられない。お腹がはってきたからといってどの位持ちますか。お金だっただけですね。それはほんの時間と共に消滅していくのですからして、どうも本当の幸福とはいえない様な気がします。けれども我々はそれを追いかけて追いかけて住していかなければならない。その幸福ではないらしいけれども何か一見幸福らしい幸福みたいなもの、それを私は仮に擬似幸福という名をつけておきたいと思います。人間生きていくかぎり擬似幸福の追究ということをして一日だって止めたなら生きてはいられない。又止める人間もないと思う。お腹がへった、そこへ食事が出てきた。食べたいと思うけれどもそれは擬似幸福です。から私はとても食べられませんかと拒絶する人はないと思います。一月延々と働いた。その月末になっていくらかの報酬を貰った。そんなものは擬似幸福だから手につけられませんかという人はないと思います。(つづく)

現代社会の動きと宗教の役割

—浄土のビジョン—

出席者 松本 徳明
佐藤 密雄
鶴飼 隆玄

司会 安居 香山

信仰に生きる宗侶づくり

松本 　しかし寺院の住職一人一人が本当に浄土宗の信仰をもっているならば、即ち自



鶴飼 氏

信教人信ですから、どこまでも……。ですから私は実に立派なはたらきができると思う。



佐藤 氏

今後どうするかという
と、その一人
一人の住職
を、健全に確
実に教育して
ゆく、育てあ
げてゆくとい



松本 氏

うことが大切だと思います。そうすると、一宗の宗団としての最も大切な仕事は、そういう人々を「能化」の人々、能化といっでは少しつけ上ってやしないかと思うけれども、と



安居 氏

にかくお寺に生活して檀信徒のお世話を
する立場に立つ人の信仰生

活を確立するという事が大切なので、いわゆる「行学」というものが中心問題になってくると思います。

勿論、宗団は宗教法人ですから、その他重要な問題が多くありますが、しかし、宗教の教団という場合には、教学が中心でなくてはならない。幸いにして、ここに教学を中心につかさどり、それに日々いろいろの努力をさせていただいておる、佐藤正大学長がおいでになるが、この最高学府においては、經典の中の物語を頭の中にえがくのではなく、現代に生きておる人間、自分自身の生活の中に、はつきりと阿弥陀さまの信仰をいただいて、阿弥陀さまの信仰と法然上人の信仰というものが本当に生きて、そして大学を出てゆく、それが地方々々にいって働いてゆけば、私は浄土宗の将来は、人類の上に大きな貢献をすると思う。

ことに、思想の混濁しておる現在の状態において、大きな役割をするものと思う。この意味において、私は、尊敬する鵜飼局長、佐藤学長の両先生に、人間づくり、信仰に生きた宗侶づくりということに、今以上の独力を差し向けてもらいたいと思います。

現代の悩みに答えての教化

佐藤 その通りですね。教師が軽くいったことでも、信者の方では非常につよくうけて、それを信じ切つて働くということになりますから、本当に自分の心から出たものでなくてはならない。まず教義にもとづいた社会的な在り方や、生活の仕方というようなものの前に、自分が信仰をもっておるならば、その自分の本当の精神誠意の言葉で相手の生活指導にこたえる。

相手の疑問にこたえるということが必要だと思う。

そのほかに、もう一つ知恩院などの在り方を考えるのですが、私はいまお説教というのは、個人的な生活指導になりがたいと思う。お説教も必要であるが、個人々々の悩みを聞

く窓口をもって、本山などには、悩みがあればそこで悩みを語り、何か自分が罪を犯かせば、また懺悔をきいてやるというような窓口をつくったらどうかと思う。

浄土宗の本山にも、信者が来ておのれの悩みなり、又親子喧嘩なぞして困っている人の悩みを聞いて、ここへ来て仏さまに、「なむあみだぶつ」と唱えれば、それで悩みは消えます、といってあげられるような窓口をつくったらどうか。具体的な問題を一つつけくわえて、私の話はおわりにします。

浄土宗の教役者の自覚

鵜飼 佐藤先生、松本先生から、いろいろ云われてお叱りか、ゲタかようわかりませんけれども、ゲタとしたら、それは仁王さまのような大きなゲタで、一寸はきかねるような大きなゲタだけれども……

私は、先生方のいわれた通りに、いま坊さんで、自分は浄土宗の僧侶であるという自覚をもったものというか、本当に浄土の信仰を何人もっているか、という疑問を投げられたのですが、私も口はばったいようですが、そ

の疑問はいつももっている。むしろ、浄土宗の教師であるというよりも、浄土宗の教役者であるという自覚が大切だと思う。

こういうことがおこって来ること自体が、まあ私自身反省もあるが、これについて具体的な話がある。いま出雲におられる安井大学先生が、浄華院の石橋御前の、浄華院に御晋山した晩に、御存知のように、石橋先生は三河の律院に育った方で、何ら生活にこだわる人ではない。何もなかったところが、大本山に入られた時には、物のない戦争末期だったが、信者から沢山の物資をもらった。衣から布団から生活道具一式揃えて寄進をうけられた。その盛大な晋山式もおわって帰られたとき、安井師がいわれるのには、「ああ、おれも女房をもつのではなかった。坊さんは女房をもつものではないよ」と述懐された。その時、私はひやかして「先生孫まで持ったから、いまさら女房もつものでないといわれたって手おくれですよ」と云って笑いました。けれども矢張り、私は安井先生の歳になつてから、なるほど真実の心の叫びであったな、という感じを、私はもってくる。

寺に育てられた有難味

と云うことは、私は七千七百ヶ寺のお寺の事務をあずかっておりまして、御住職が果して、明日の問題について、浄土宗の僧侶としての自覚に立った方策をお考えになっておられるか、それとも自分の子供に世代を継がすためにお寺をどうもってゆくかとお考えになっているか、という二点について考えてみると、むしろ、今の寺院住職方は自分の子供の明日の生活のために、お寺の経営を考えておられるというような疑いが出てくる。

従って、そういう親の考えの中から育ってくる子供ですから、松本先生が云われた寺で育てられたという有難み、いわゆる昔の仏恩報謝というか、そういう気持ちがある今の若い僧侶にはない。これを植えつけないければ、寺に育った有難さという気持ちが僧侶の中に出てこなければ、自信教人信の教化活動は出来ない。それをどういう形かで、一宗がもってゆくかということ、いま私は考えております。

かつて寺の小僧が大学へゆくといえ、学

費は信徒が出してくれた。しかし、今は逆で、檀家なり信徒から金をもらって大学へやるということは甲斐性がないように考えている。檀家には迷惑をかけない。おれの子供だからおれが学校へやってやるという考え方が親に強い。従って、子供もそのような考え方をする。それがもし弟子だったら、おそらく自分が食べるもの着るものも粗末にしてまでも、大学へやろうという気持ちよりも、おれの小僧がゆくのだから応援してくれ、と檀中に頭を下げる。自分は自分の生活を楽しむのだと思うんです。そこに肉身の弟子をもつということ、他人の弟子をもつということとお坊さんの心の変化がおきて来る。これが教団に大きな影響力を与えていると思います。

生かされた喜びの中に法施に生きる

いますぐ、このような沢山の色々な問題を復活させてゆくことは困難であるとすれば、出来れば、教団でこれを何かの形で浄土宗の僧侶は浄土宗全体でこれを作り上げてゆく、

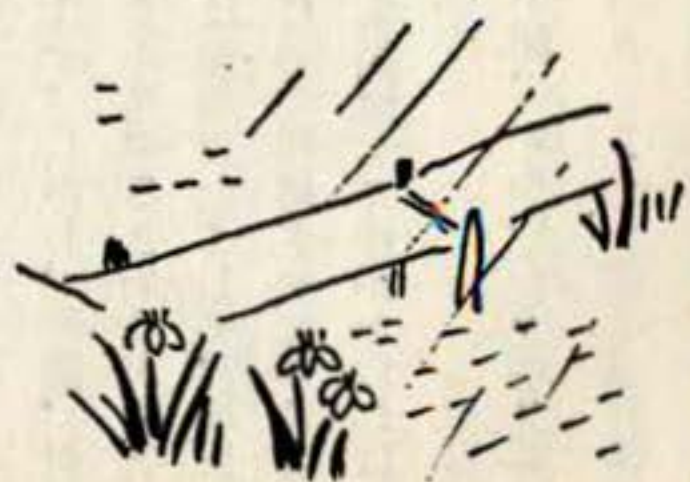
というだけの方針と経済力を養しなわねばならないでしょうね。そこには、少くとも浄土宗の大正大学や仏教大学の学生は、高校卒業まで親や師匠が育てたら、あとは全部一宗で授業料も出して生活面もみてやって四年間を育て上げて、そして浄土宗魂をたたき込んでゆきたい。そして、浄土宗に育てられたのだという気持ちを与えなければ、私は浄土宗の本当の復活はないということを考えております。

お坊さんというものの存在が本当の存在と在り方というものについての理解がまだ一般人にあると思うのです。ただ、これをどういう風にもってゆくかということが、今後の問題だと思うのです。しかし、所謂、財法二施の生活をお坊さんがやるという考え方をやるためには、私は理論でなくして、現実にもこの世界からはじめて体得させてゆくという考え方で、教師も指導してゆかなければならないと思います。

司会　ながい間、いろいろ有難うございました。

臨 終

合 田 微 雪



幼稚園の頃だった。夫に死別し女の身で始めた事業も不成功に終わった母の長姉を某新興都市の街はずれに母と慰問。唯一人背戸に出てみた時、広い麦田の中から低くヨイショヨイショという掛け声が洩れてくる。近づくに数人の労働者に取り囲まれた担架に、血だらけの重傷者。向うの建築工事場での事故らしく、顔はまっ青、もう息絶えている。

それでも荒くれ男達が非常に慎重に運んでいるのを見て、人命の如何に貴重なものであるかという事を、幼な心に知った。

小学初等の頃。病床のぐるりに皆して坐り、掛蒲団の中

に揃って手を入れている。誰かの目配せで私もそうすると、丁度病人の腕が手にあたり、激しく痙攣している。ハッとして確とつかんだ。でも本人はすでに意識不明なので苦しくは無いだろうと、ホッとした。ずっと幼時、この伯父と或宴席で並んで坐り、鯛の身を次々に私のお皿のふちに取って貰った思出がある。実は私は魚嫌いであったが、その綺麗に並べられた魚の身だけは、真珠のネックレスの様に見えた。

中学初等の頃。愛犬が犬殺しにやられた時、父は仏壇にお燈明をあげた。元来動物を飼う事は、父から禁じられていた。猫でも家に迷い込むと、父はその首すじをつまんで

垣根越しに放り投げた。が、その父に叛いていざ猫を飼ってみると、父は自分の箸にお刺身をつまんで猫の口に与えている。考えてみると、放つても猫はちゃんと立つ動物であり、箸で食べさせても猫の口に箸はあたらず非衛生では無い。一たん飼うからには、可い加減の愛情では済まされぬ。それ相当の責任と覚悟の必要を、身を以て訓してこれたのであった。

だから猫が老衰で死んだ時でも、母に抱かれ甘えて啼きながら息を引取った。よく猫は死ぬ時姿を見せぬと聞いていたのに。拙い「愛犬の死」なる手記に、作文教師から長文の読後感を寄せられた事も面映ゆい。ついでながら拙宅の庭隅に数匹の犬猫の骸が埋めてあるが、決して立派な墓では無い。所謂「猫可愛がり」は禁物である。

サラリーマン時代、一同僚が衝心性脚気で亡くなったが、その前夜「酸素吸入が苦しい。のけてくれ」といった。遙か郷里から馳せ付けた彼の兄君は「無理もない、早う成仏し度かろう」といいかけた時、反射的に私は止めた。すでに医師から絶望の宣告を受けていたが、とても今直ぐ死ぬとは思えなかったから。「確りしろよ」といった

ら「ウン、この吸入でよくなるんだろ、頑張る」空がしらはじめると「楽になった」という。本当にそうらしく、呼吸も静かになった。

実は其頃私は、会社の事務と彼の看護と出品製作とで、ここ十日間殆ど寢床に就かなかった。夕刻早々に事務を切上げ、当日に限り途中の電車々掌に起す様依頼せず目を覚し続け、病院の長廊下の壁面を居眠りしながらの伝い歩きもせず彼の病床に来てみれば、たった今息を引取ったという。それも、兄君は寸時不浄に立ち、傍に居合せたのは叔父君唯一人であったと。

父の亡くなったのは、終戦前後の物資欠乏も知らぬ昭和十六年。中風で、付添看護婦の「お呼びです」に、父に一番お気に入り妻が行って直ぐ引返し「電気をつけて上げても、つけてくれと仰しやいます」という。不吉な予感が出て駈付けると、床の上に坐ったまま、電灯がついているのに同じ事をいう。ハッとして医師に電話して戻ると、もう寝かされていて昏睡状態。あっけないとはいえ、楽なこゝと此上無い往生振りであった、加うるに其年の末、父の生れ変りの様に一人娘誕生。父は美男のお人好しで、誰彼か

らも愛され、市内禿頭会番付にも東大関と載った。ついでながら私にとってたった一人の兄も性優しく弟思いで各種運動の万能選手だったが、大学時代思わぬ交通事故負傷し、弟の私は貧弱な体軀の上五十過ぎていまだに禿頭にも白髪にもならぬ青二才年寄り、二人とも出征失格で人間万事塞翁が馬とはいえ、右手左足の不自由な兄を見る度、この胸がうずく。

終戦少し前、伯母の死水とりに母の場合の演習心も手伝い、懸命につとめた。後悔を最少限度に止むべく努力する者程、健康に仏顔を仰ぎ得ると考えた故に。病人の片足に出来ていた腫物に、思わず手が触れて潰れ、臭いを放ったが、不思議と嫌な気がしなかった。

二人きりの愛児の、二人共戦死された某老夫婦に対し、お察しするにも、手塩にかけた者の不慮の死といえは子飼いの畜生、肉親に関する事といえは父の天寿以外は右兄の負傷の悲しみ程度しか体験せぬ身を、心中に詫びた。

いとせめてと、また或靖国の母君に、令息追悼の歌を作詞作曲して捧げたところ、お礼にと今の妻を心配して下さ

った。

それにしても如何して「最後の看取り」というものに関心を抱く様になったか。亡父が母を迎えるを潮に、或二女性をそれぞれ結婚させ、後其中の一人の夫君（前途有為の新聞記者）が胸の病で倒れ、拙宅の一室で永眠。それから未亡人は毎年正月父不在の日、古風にも遙々遠距の地から舞踊の女弟子一人を連れて母の顔を見に来られ、それが永年続いた。今一人の女性の一子も青雲の志も絶望の病で入院中某海沖で、あったら貴重な生命を入水自殺、其新聞記事切抜きと、処々涙で墨色のにじんだ遺書が、今も手許に。

母の重態の時には、痛み止めを連続注射し、途切れそうな時急遽往診して貰っていたが、其日の若い子息の方の医師の前で母が「抱いて」といった。が、医師は「しない方がいいでしょう」といったが、其医師を送って他の付添人も出てゆき二人っきりになるや、とても抱く事不可能の重病人ながら、確と抱いたと同じ効果の姿勢をとった。そして……。

それから間もなく母は文字通り眼るが如くに永眠したが、手を握っていないながら脈の止った瞬間に気付かなかった。

た。無くなっている、まだある様に錯覚した凡夫の哀しさ。

それにしても、度々臨終の場に遭遇し、家族がし得ないと見ると代って来迎を知らせて成仏させ、楚々たる風情にも似ず確りしているといわれ、私にとっても此世で一番強く頼りになる存在であった母が、齢を経るにつれ次第に逆に、私の子供の様になっていった。

その心に報ゆるべく私はどの程の事をし得たか。慚愧に耐えぬ胸内を僅かに温めてくれるのは、母が常に私の妻を殊に病床に就いてから彼女の献身看護を、感謝していた事の思出である。

私は静かに釈尊の涅槃・法然上人の成仏、キリストの昇天等々を忍び参らせた。

それから、私の読み聞きした種々の臨終場面を考えてみた。

某作家の自叙伝だったか「母の臨終直前に許された若い男女が、別室で歓喜の時を過し引返した時、すでにその母

は事切れていた」と。

仏詩人の作に「老母が二十日余りの不休看護に、ツイうとうとした間に、息子は息を引取る」というのがあり、それには「母の眠りを妨げぬ様に、物音一つ立てずに死んでいった」という註がついていた。が其場には誰も居合せず、呼んでも母が目を覚さなかったか、もう呼ぶだけの力が無かったかも知れない。

いずれにもせよ、その母の心残りを察すると、胸がいたむ。

其他、昇天真際に「畜生つ！」と叫んだ天才画家。

枕辺で泣く人々を一瞥し「演技が拙い」と嗜め往生を遂げたという名優等々。

当人にとって二度と無い時間だけに、私自身もあの時は斯うすべきであった等と後悔もし、さて又何れ来るべき自分の場合には如何にすべきかとの覚悟に考及する時、浄土誌表紙を飾る仏像一つにしても、芸術雑誌等で眺める時と異り、一入感慨深く拝する昨今である。

心の受けとめ方

宝田正道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

宿かさぬ人のつらさをなさけにて
おほろ月夜の花の下臥し

(蓮月尼)

去る四月、三十年ぶりに京都を訪れて、知恩院に参詣した。京都駅近辺は、すっかり変って、駅南口の新幹線乗降口や夜空に聳える明るい駅前のモダンな塔など、珍しく印象に残ったが、古門前から華頂会館の前を通して黒門に至る葉さくら並木は、昔ながらの静かな風情を残していて、殊に懐しかった。

祖山の寺務所に旧友のY教務部長を訪ねるべく、黒門の前に立った私は、ふとそこに立つ掲示板に、蓮月尼のこの和歌が書きつらねてあるのが目についた。Y君の話だと、黒門前を通るBGや修学旅行の女生徒たちまで、立ちどまってノートしてゆく光景を、時々見かけるといふことで、わかりやすく、なかなか風情のある点が女性好みの和歌であることを示している。

彼女は寛政三年、京都知恩院の寺侍の娘として生れた。俗姓を大田垣、名を誠のぶとい

う。天性の美貌に恵まれた上、幼くして和歌の道をたしなみ、また、茶の湯、生け花、書道のほか武術、囲碁の類に至るまでよくしたといわれる才女であったが、天は二物を与えずというか、家庭的には不幸な女であった。近藤某を迎えて婿とし、四人の子女をあげたが、みな夭逝し、夫もまた病歿したので三十三歳の時、夫の遺体を納めた棺に自らの黒髪をぶつとりと切り落して入れ、剃髪して出家した。蓮月というのはその法名である。

四十歳の頃、老父の死にあい、自ら陶土をこねて自作の和歌を添えたやきものを作り、糊口の足しにしたが、短冊もまたよく売れた。しかし、その美貌と才氣を目当てとして言い寄る男も多かったらしく、自ら歯を抜いて誘惑から身を守ったという。また、それでも陶器を買いに來たり、書を乞いにくる客もふえる一方なので、経済的な理由も手伝って、東山の麓を転々と居を移し、世人から「屋越しの蓮月」と呼ばれた。

手すさびのはかなきものを持ちいでて
売る間の市に立つぞ悲しき

とか、

浮雲のここにかしこに漂うも消えぬ

ほどのすさびなりけり

などと詠んだのも、恐らくこの頃のうるさい世間と貧しい暮しの心境を嘆いた悲歌の一種と思われる。

しかし、彼女の手すさびになる茶碗や陶器類は、その無心の美が声価を呼んで、購うもの後をたたず、ついにそれを模したにせ物を作る陶工や悪徳商人まで現われるに至った。しかも、彼らは臆面もなく、彼女の寓居にそれらにせ作品をもちこんで、「これでは売れぬから、自らの筆で署名の和歌を添えてくれないか」などと、傍若無人の虫のいい話まで切り出す始末であった。

さすがの蓮月尼も、自らの生計を脅かされることでもあり、その凄じい商魂に呆れて、一喝のもとに追いつ返したかと思いのほか、にせ物が現われるほど自分の作品が高く評価されているのはありがたい上に、今また、それに自筆の歌を添えることであな

たが儲かるなら、これもまた世のため人

すけ、とばかり、快くその請を許したとい

う。まことに、常人ではとても叶わぬ慈悲

の権化とでもいうべき寛容ぶりである。

冒頭の「宿かさぬ……」の歌も、たまた

ま一夜の宿を乞うところが、無情にこと

わられたのを恨みとも思わず、そのため、

かえって風流な花を見ながらおぼろ月夜の

野宿ができた喜び、相手の辛い気持を無

上の情と受取っている点が、蓮月尼らしい

感謝の情感を現わしていて快い。要する

に、相手を鬼にも仏にもするのは、結局己

れの受取り方次第であるという教訓が、巧

みに歌いつくされているのである。

蓮月尼が念仏三昧の生活のあけくれ、

「吉水の流れの末の広がりて四方に満ちた

る法の尊さ」と詠んでその六百五十回の御

忌を祝した宗祖法然上人は、かつて己れ

の流罪を辺土教化の機会を与える朝恩であ

る、と感謝の心で受取られた。ちよっと肩

消するものである。恨みに酬いるに恩をも
ってし、怒りに対するに笑顔で接する世
間、そこに信仰というものの深い存在価値
があらわれる。信仰のある人となない人とは、結末が雲泥の差となって戻ってくるのも当然である。

禍を転じて福となす、という言葉がある
が信仰とは、誰にでもふりかかる同じ悪条
件の場合、それを軽く受けとめるか、重く
受けとるか、その時の心の立て直しを指す
とも云えよう。ふりかかる禍を蓮月尼のよ
うに信仰をもつ人は、善意に受けとめて福
と感ずるし、そうでない人は、神も仏もあ
るものか、と宗教をバカにして、禍の傷口
を一層深く身に感ずるのである。人生万事
「宿かさぬ人」も多いが、そのつらさを思
いやり、「なさけ」と受けとめる心の修養
をつみたいものである。

がふれあった、足を踏んだといつては、す七月号予告——来月号の「村田嘉久子幼い立
ぐ睨みあい、喧嘩沙汰になりがちな現代のちの記」を手始めに、各方面の方々の幼い頃
とげとげした社会や感情も、常にこうしたの御様子を聞き、その感想等を記すことにし
仏慈悲恩と受取る心がけによって、忽ち解しました。この新企画に御期待下さい。編集部

浜野義光氏

高橋良和

(中外日報取締役)

この間東京伝通会

館の鈴木積善さんのことを書いたら、どうしてもつづいて書きたくなった人が浮かんできた。同じ仕事の人が前後して登場するので読者の方には迷惑かもしれないが、わたしとしては忘れ難い人なので思い出を書いてみたいのである。

それは、この鈴木積善さんの下にあって同じ伝通会館の仕事を手伝いながら、鈴木さんの逝去後、やっぱり伝通会館の主事をひきうけていた浜野義光氏のこと

である。

凡そ浜野氏に僧正など、ということばを使うと不似合の感じがするが、今どきダブルの服でも着せたら実はよく似合うスマー卜なこの浜野義光氏は我々の仲間ではなかなか話のよくわかる男であった。

身体がそう強かったわけではないが、あの細い柳のようなタイプであるのに活躍ぶりにはたくましさがあった。

その昔、昭和六年頃に、浄土宗では児童教化の指導者養成をやったことがあった。その施設を児童教化員養成所と名付けて、東京と京都に交互に開設されたのである。現在の本宗の児童教化運動の東西のメンバーはこの養成所で作られたのである。浜野氏もそのメンバーであって、本宗のボーイスカウトの指導者でもあり、日曜学校の熱心な開拓者でもあったのである。

若くして夭逝しただけに附合は十年余りであったが、丁度昭和七年、子供の仕事ではじめて東上したとき、この浜野氏はわたしを迎えて土地不案内の田舎者をあちらこちらと案内してくれたのである。一宿一飯の仁義をうけたということは人間にとって一生忘れ難いが、それから後にも機会毎に、ハガキ一枚でよくひっぱり出してくれたので、あるときは熱海に、あるときは湯河原にと湯につかりながら、浄土宗の児童

運動のことをよく相談したものであった。

この浜野氏はなかなか洒脱の人で、一寸脱線しても、酒の席ではいつもこの人が中心となったのであるから、旅館や、料理屋の女中たちの話題をすっかりさらってしまいうほど座談のうまい人であった。少しばかり低音の、多少音程がはずれるようなあの声が魅力だったのかもしれないのである。遊ばなかったとは申しかねる。遊んだのはたしかであるが、あれなら遊んだっていいと思うのは我々友人仲間の観察である。それほど人をそらさず、ユーモアやウィットを発散して話すのであるから、おそらくもてたと思うのである。ひょっとすると我々は浜野氏のひきたて役の方に廻っていたかとも考えると、いささかこの人のダシになっていた感もあるが、とも角も愉快な人であったのはたしかである。

その頃は東西の児童運動の仲間がつねに交流したし、また宗内でもいろいろな会合があつて、当時十二時間もかかる東海道をよく往復したものである。

いつか梅の見頃るときであった。浜野氏はわたしを熱海に呼び出したのである。熱海の宿におちついて、梅林の茶店で茶をすすり、いろいろと児童教化のことを語ったことがあつた。それから十国峠を越えて箱根に赴いたのである

が、わたしに箱根でみる芦ノ湖のさかさ富士をみせてやると口ぐせのようにいっていたが、湖畔に立ったときにつくづく友情のあたたかさど富士の美しさに惚れたものであった。

梅の頃になると今でも浜野氏と芦ノ湖の富士を思い出すが、山中でのスカウトの実修所ときは、この浜野氏も参加していたが、テントを張る日から大雨となつて、水浸し、一週間のキャンプ生活が一週間とも雨、燃やすたきつけもずくずく、割木もぬれて用を足すことが出来ず、といってボーイスカウトの実修所であるから文句のいいようがない。そのなかにあつて、テントのなかで抱き合つて寝た一週間の思い出は忘れ難いものがある。

鼻をつまらせたような声で、「オーイ、エエ修養やな」と笑いをふくんで話かけた浜野氏の顔が今でも浮かぶのである。この人はなかなかアイデアマンである。当時伝通会館にサンガアソカという仏青があつたが、当時サンスクリットの横文字の仏青をつくつたなどはこの人が最初かもしれぬ、今はどうなったかしらないが、わたしもそれをまねて、マノプリサー、サンガという仏青を京都でつくつたものである。

今生きていたらどんな仕事をしたんだろうかと思うとこの人の夭折は宗門にとつても損失であるが、もう二十年以上は過ぎてしまった。

浄土のこよみ

— 六 月 —

大橋俊雄

比叡山は日本仏教の母なる山であるといふ。この山で学び修行し、巢立った宗教家は多い。法然さまも親鸞上人も、一遍聖にしても日蓮・道元でさえも、一度は叡山にのほつて勉強にいそしんだ。

深奥な天台の教えこそ、これら真摯な宗教家にとっては豊かな思想の源泉となつたのであり、中世の清新な仏教運動はこの山からほとばしりでて展開した。叡山は延暦七年、最澄によつて建立された比叡山寺が敵矢で、延暦寺と改められたのは弘仁十四年のことであつた。その前年の六月四日最澄がなくなり、この忌日を卜して、門弟たちは追恩の志やみがたく集会して法要をいとなんだ。今に山家会とか六月会として最修がつづけられている。

天台宗から別立して法然上人は浄土宗を開いたが、その浄土宗は寓宗とか附庸宗と呼ばれて、室町前期の頃までは一般的には独立した宗門とはみとめられておらなかつたらしい。宗門の発展は、一には内にもえるがことき熱心な求道者の布教と、偉大なパトロンによる外護がなければ、世俗的な展開をもたすことはできない。徳川家康は慶長八年二月征夷大將軍の宣下をうけたとき、知恩院を香華院と定めて、寺領七百三石余を寄進された。時の知恩院の住持は満譽尊照で、彼は元和六年六月なくなられるまで、知恩院が一宗の本寺として、内外の整備と美観をととのえることのできるよう、大いに努力なされた。当初の知恩院は、今の勢至堂を中心とした一帯のせまい地域をしめていたのであつたが、徳川家康の生母伝通院殿が伏見城でなくなり、葬儀が知恩院でとりおこなわれたことが契機となつて、伝通院殿菩提のために寺域を拡張し、堂宇を営構することを命じた。中段や下段にあつた寺々は、ことごとく他の地に移され、その跡には七カ年の歳月がついやされて、中段には御影堂、集会堂と大小の方丈、

それに大小の庫裡などが建てられ、下段には二十余か寺の塔頭が設けられて、輪換の美は一新された。「開宗秘密記」という書物には、家康がこれほどまでに力をつくして建立されたのは、若し朝廷が徳川幕府に対し背反し、一朝事がおこつた場合、知恩院を橋頭堡に迎えうつことができるような配慮をもつていたからであるというているが、中村直勝博士も栗田口といえ、京都東面の関門として、四方にある七口の中でも、最も意義の深い出入口であつた。ことに鎌倉に幕府があつた時代においては、軍事的にも大きな要塞であつた。特に江戸時代になれば、このへんこそ幕府が占有すべき第一の橋頭堡でなければならぬ。見よ、知恩院への入り口の厳めしさを。この黒門、この石垣、この曲折する道。これが寺院であろうか。これが極楽を説く人々の居所なのか、これが法城の姿であろうか。城である。争いのあり得る修羅場である。少なくとも城門であり、城構えである。徳川氏の親兵が、もし入浴するの要ありと

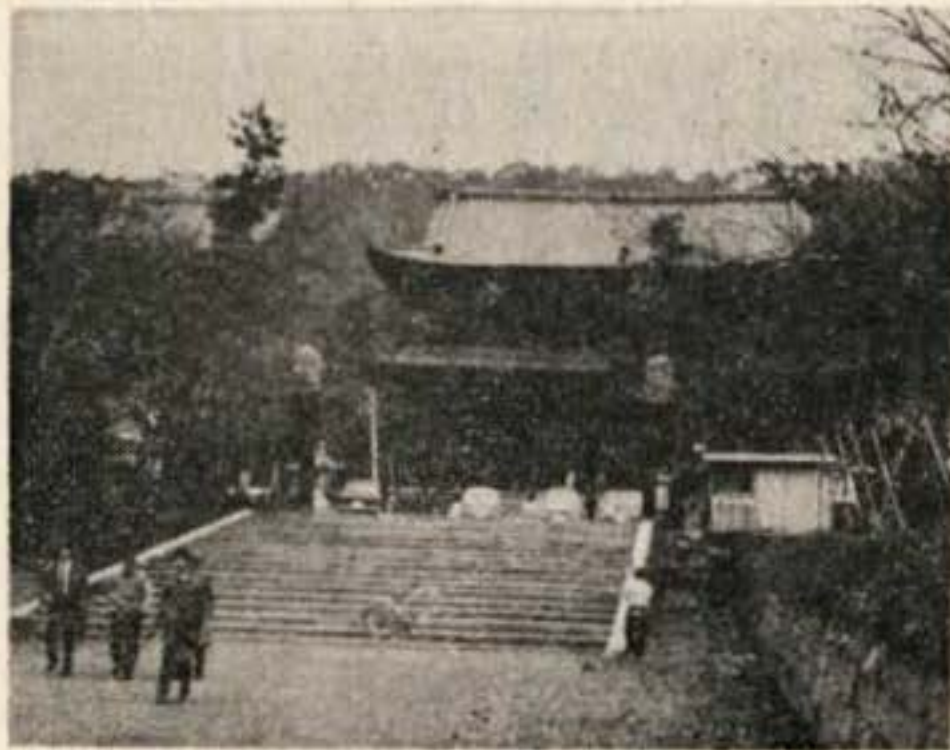
すれば、その第一軍營にあてられるのが、知恩院ではないか。

芝の増上寺は、その意味において、一種の人質的な存在である。教権分立にも役立とうし、教権制圧にも最も有効なる質草であった。私はこの門前に立って、徳川氏の対寺院政策の巧妙さに三嘆するものである
(統京の魅力)

と申されている。元和五年五月には宮門跡が定まり、境内下段の北部に宮室が建てられ、門跡領として一千四十五石あたえられ、後陽成天皇の皇子八宮直輔親王が知恩院の門主となった。良純法親王と申される方がその人であり、浄土宗諸法度三十五箇条が制定されたのも尊照の時代であった。

この六月になくなられた、もう一人の高僧に厭求がいる。彼は宗団史の上には専修念仏者として、大いなる足跡をのこされた。幼にして出家の志のあった彼は、幾度びとなく両親の許しを請うたけれども許されず、それがようやくにして望みをかなうことのできたのは父の死であり、亡父の喪明けした翌くる年、専念寺信譽の室に投じて剃髪した。時に

十三才であったというから、幼少の頃より、単なる出家へのあこがれではなく、真に仏道を求めたいという心念が心の奥深くに秘められていたといえよう。そして十七才のとき、江戸に遊学し、靈巖寺の学寮に入り、珂山に



知 恩 院 三 門

師事して宗義を聞いたが、たまたま明暦の大火にあい、数万の人々が逃げまどい、焼死した姿を目にし、又火をのがれようとして乗った船も、他の船にのりついで後ろを見れば、もうその影すら見えない。ここで彼は、無常

の殺意はつねに時処をえらぶことなく、おそい来ようとしている。このとき頼むべきものといえば本願であり、修すべきものは念仏でしかない。この法こそは阿弥陀如来が私たちにお示し下された大道であると喜び、身をおくして一時大垣の大運寺で日に夜をついで常念仏をつとめられたが、母の死はまた彼の性格を、より西方浄土に志向させることになった。以来住山していた有馬温泉の極楽寺を辞して、北は出羽から西は安芸出雲にいたる各地を遊化して、浄土の教えをひろめるとともに、洛の内外をおそった天和の飢饉の際には餓民救済のために大活動されたという。身にとっている衣をぬいで米にかえ、日用の調度をも米にかえて飢饉になく人たちを救った。この姿をみた人は大悲薩埵といって、その徳に感じたという。厭求は正徳五年六月十日世を去られたが、このような人たちがおったればこそ、今日の浄土宗の姿があるのだといえよう。先徳の尊い姿に接して、今一度宗門の歩みを反省しよう。

初夏の日さしを浴びた六月夏安居がつとも、七月盆もそこに近かついてきた。

忍の徳

渋谷賢 応

諏訪仏教会副理事長

これも檀家の未亡人のお話である。

このおかあさんは七年前に夫に先立たれ、三人の子供を女手一つで、それこそ文字通り女手一つで育てられ、長女は美容師としてその技術と資格を身につけてこの秋嫁にやることになり、一人は東洋大学経済学部二年在学中、最後の一人は目下工場に働き、定時制高校在学中である。田地一反五畝、職業は専ら衣類の行商である。しかも行商の対称となる範圍が八十戸の部落に限られている。その部落以外歩いたことがないのである。それで生計を立ち、子供を嫁にやり、大学に出し、男もかなわぬ働きをつづけているのである。この四月十九日が主人の七回忌の正当で、以下はその日、寺参りのときのお話である。

「おとうさんも、もう七年になるんですね。しかしこの七

年はさぞかし大変なことでしたらう。」

「ええ、それこそみんな、みなさまのおかげさまでどうやらここまでこぎつけて来ました。」

「失礼な言い方かも知れませんが、よく八十戸ばかりのお客さまでやって行かれるもんですね。」

「みなさんがとりもって下さるものですから、出かけて商いのないという日は一日もございません。もうあの村に十七年もまいりますが、今では私に用のある方は田んぼに行っても近所の留守居のある家へたので行ってくれます。」

「もうすっかり信用を得ておられるんですね。」

「ええ、おかげさまに、この間なんか年取ったせいなんでしょうね、仕入れ帳を二度も忘れて来ましてね。それには何をいくらで仕入れて、どこへいくらで売った、どこにはいくら貸しがあるなどとみんな書いてあるんですよ。それを忘れて来て『ひさよさ、いいものを拾ったよ』ってとどけてくれました。」

雨が降ってくると荷物をどこへでもあずけて来るんですよ。みなさんが親戚みたいなんです、一度も中味がなくな

ったことがございません。面白いのは行つて見るとその家で商売しておつてくれましたね、『ひさよさ、あれはあの家にとどけ』といたでな、これはあの家にとどけ』といたでな』つて報告してくれました。」

「村中支店を出しているんですね。これも失礼な言い方だが、子供さんを大学に出しておられてよく問屋にコゲツキができませんね。」

「私んところは問屋から品をもらうんではありません。行商の下働きなんです、その人は名古屋の問屋から大量に卸して来まして七、八人に売らせているんです。」

「それじゃあ分も少くなるでしょう。」

「それがね、その人は半島人なんですよ、ものすごく厳しくて、金を入れなければ絶対品をくれません。十七年もやつておれば少しはいいだろうと思つても、これはもうはっきりしています。その代り又、私たちにもうけさせてくれる所は正直一方です。日本人はだめです。よく町の大きい問屋や呉服屋さんが『ひさよさ、売ってくれねえか』なんて云います。私はみんなお断りしています。それでも私の所でどうしてもし間に合わない婚礼の衣裳などありますので頼むこともありませんがだめです。日本人はすぐ頭をはねることしか考えていません。」

「そういうもんですかねえ。今まで随分いやなこともおありでしたでしょう。商売していて。」

「ええ、一番いやなことは品を置いてもお金をくれないことです。ただお金をくれないだけならいいんですが、『いつの日までに必ず払うから』と云うもんですから行つてもくれない。それでも二度三度と行かなければならないんですが、そうするとこつちもだんだん行きにくくなつて来てどうしても遠ざかるようになる。それでも行くと『金がない』『たらない』などと怒鳴るんです。まだそれだけならいいが私が帰りかけると後から聞こえよがしに罵るんです。もう我慢できない。こんななまでに云われて、と思つても、これで怒ってしまったらもうこの家にくることができない。『ひさよが怒った』と村中評判になる。」

私は学校の補習科のとき先生から、『忍の徳たるや苦行持戒も及ぶこと能はず。能く忍を行ずるものはすなわち名づけて有力の大人となすべし。もしそれ悪罵の毒を歡喜忍受して、甘露を飲むがごとくする能はざるものは、入道智慧の人と名づくべからず』と云うお経を習いました。いくどこのお経を繰り返して読んだことか、私はひと時も忘れていません。このお経こそ私のためのお経だと思つてありがたくいただいているのです。」

祖山で実践を佛教を受けて

阿部一成

(大正大学大学院修士課程)



居先生がこられた。この先生にはずいぶん叱

られた。勤行前の集合で叱られ、休憩中にねころんで叱られ、塵が落ちていて叱られ、食作法で叱られ……その回数、私が一番多かったろう。相撲をすれば勝てるのにと想ったのは、初心の行僧の妄念である。この小文を書くよう先生に命じられたのは、さしずめ、最後のおしかりかもしれぬ。

私個人にとっての祖山登嶺は、この実践仏教が二度目である。もっとも、一度目は、登嶺とは云えぬ。数年前、関西哲学会の帰途、恩師につれられて京に寄った。その先生曰く「君は浄土宗だろう。あのむこうに見えるのが知恩院だ。ここで待っているから、ちょ

っと行ってきなさい。」

「いいです。」

「いいですとはなんだ行ってきなさい。」

走って行って又、走って帰った。

「どうだった？」

「大きな山門ですな。」

二度目の登嶺には、私は私なりの求道心があった。僧侶として生きる決意はあったが、しかし、それ以上のものがなかった。生活無き信仰は空虚である。別にカントをもじったわけではないが、事実そう思う。

我々の多くが、知恩院ははじめてであった。その感想はさまざまであろうが、私は私なりの想いをかきつづつてみたい。あくまで

昨年の九月一日から八日までの一週間、大正大学でははじめてのこころみと云う知恩院での実践仏教。二年生を中心に、七五名が参加した。大学からは、我々の監督として、安

も雑感である。

京の暑さは日本最高と聞いていたが、まこと、身にしみてそれを知った。まして今夏は暑かった。しかるに、就寝までは休憩中も白衣でとおした。いや、正直に云えばとおすように命じられたのである。だいぶん意味するところが違う。二日目。昔、柔道をしていた頃の道場の「かおり」を懐しむことになった。

それだけに、早朝、長い廻廊を行道して勤行にむかう時の清々しさが尊かった。自然がいかにも人間の心を浄化し、その心根に豊かな宗教的心像をわきたたせてくれることか、それを知ったのは、知恩院の朝である。東山連峰のいただき、朝の太陽光線は明るく白く広くそして、幾筋にも、弥陀の来迎し給う道筋を示すように躍り降りて来る。その光は、私の目を貫いて祖山の大地に深く強く密着する。南無阿弥陀仏が、自然そのものの適確な表現に思えた。自然に口をついて出た。自然の無常は、ここで、この時のみ不変であった。

五時起床、それから、清掃、勤行、朝食、講義、勤行、中食。午後講義、夕食、入浴、勤行と続く一週間であった。百万遍知恩

寺、浄華院、清涼寺、光明寺を参拝出来たことは、我々一人々々の心の内に、おそらく一番大きな痕跡を残しているかもしれぬ。この参拝で、宗祖への追慕が非常に具象化されたようである。もっとも、バスガールさんには、「しょうもないおほうさん達」と形容された。車内では、ことあるごとに、この一週間で最高の熱心さと高声で念仏申したからである。道行く人にむかって、運転手氏やバスガールさんにむかって。まさに御十念が、青春への讃歌となった。

祖山でのこの一週間は、これからの宗門に生きる、生き抜かねばならぬ若き七十五名にとって、たしかに一つのエポック・メイキングだったと云える。猥下から親しく御十念を授けられたことが、知恩院の方々の御厚情が、わざわざ知恩院にまで歩を運んで我々を激励して下さった学長の深い慮ばかりが、今頃になって回想されてくる。

我々青年僧に求められているのは、オポチユニストの仏教批判ではなくて、真摯な明日へのエラン・ヴィタールであろう。知恩院のなかに、真摯な、古武士的な、本当に人間的

な僧侶の存在することを私は知った。「人間」であることが、かくも困難なこの時代に、あまりに人間的な御老師達が今日もあの祖山の廻廊を歩んでいると知るとは、一つの大きな慰めだし、私達にとってこれ以上のけましは無いたとも云える。

八日、閉講式の後、よく晴れた京の町に出た。京極で見た尼僧の清楚さが、ついさきほどまでの自分の姿とくらべてなんとまあ生活的であったことか。

帰京後、某女学校の教壇で問いかけてみた。

「知恩院を知ってるだろう」

可愛い声で

「知りません。」

「修学旅行は何処へ行った？」

口々に

「京都です。」

「では知恩院に行ったはずだ。」

「行きません。」

「それ、あれだよ、廊下がキュツキュツと

鳴る……」

「ア、行きました。それ、ウグイスバリでしょ。」まことに彼女達は博識であった。

家康と三河一揆

鶴田湛泉



一、若き城主

永祿三年九月十九日、今川義元が天下の覇者をめざして上洛の途上の桶狭間で、織田信長に破れて討死したことは、東海道諸国の形勢を一変せしめるほどの影響を与えたが、とりわけ松平元康（後の徳川家康）の生涯に取っても大きな転換期ともなった。

六才の幼時に国を出て、或は織田氏に或は今川家にと十有余年という長い人質生活からやっと解放されて初めて岡崎の城主となり得た若冠十九才の若き城主元康は、主君の帰城を待ちこがれていた宿将家人に擁せられて、敢然として三河の

経営に乗り出すこととなった。

元康が人質として織田から今川へと他領に送っている間の松平氏の家臣は、全く文字通りの臥薪嘗胆の歲月であった。

岡崎城は今川氏から派遣された城代が占拠していたが、領地はまるで今川氏の属領の形となってしまうと、その圧力には抵抗することは出来得なかった。

松平の家臣、鳥井忠吉、阿部正澄、石川康成等は租税と庶政とを掌ってはいたが、その所領からの収入は吏を置いて悉く取りあげられ、将兵は今川氏の合戦ある度毎に動員され、いつも最も消耗の多い先陣に立されていた。勿論、農民も戦費を負担させられていた。

而し領地は減少していたし、重税のため経済力は弱体化し、このため三河武士の惨状はその極に達し、武士百姓と同じように鎌鋏を取って自ら耕し自ら給し、昼夜心をつくして身を碎いて働き、辛うじて妻子を養い生活を維持し、十余年間に落魄のうちにも堅い団結をもって、ひたすら幼主の帰城を待つことに唯一の望みを托して再起の日を期していたのであった。

元来、松平家は今川氏に属していたし、松平家のみではなく三河にはこれまで今川氏の勢力が浸透していたので、他の諸將豪族も大半まで今川氏の旗下であった。

岡崎の主となった元康は刻下の問題として、これまで通り今川氏に与するか、義元を倒して俄然擡頭して来た織田信長と結ぶべきかという大きな岐路に立たされた。

今川氏に対する態度は複雑微妙な関係のため初めは去就を曖昧にせざるを得なかったが、義元の後を嗣いだ氏真は甚だ凡将だったし、一方信長は元康を末頼もしい偉丈夫と信頼してか、家臣の滝川一益を使者として好修をすすめるに來ていた。その上、元康の生母の弟である水野下野守信元も蔭でしきりに斡旋したので、終に今川氏との好を断って織田氏と結ぶに至った。或は元康としても、天下を目ざす志のある信長に加担することは、日頃大樹寺の登誉天室から説ききかされ

ている和順の世界を築きあげる近道との考えもあったのかも知れない。

しかし、今川氏とひき繼いで手を結ぶべきか否かとの重臣會議が、元康を中心として、酒井雅之助正親、酒井左エ門忠次、酒井將監忠尚等で開かれた時、松平家はこれまで数十年來、今川氏の勢力を借り今川氏を後楯として来た長い間の義理を説き、一方織田氏とは先祖代々はげしい敵意を互に抱いて対立して来た仲であることを強調し、今川氏と好を断つことの不利を説いて止まなかったのは、当時權勢すこぶる大であった酒井忠尚であった。

正親と忠次とは今川氏と断たんと主張し、いよいよ重臣會議が織田氏と結ぶべきであると決すると、酒井將監忠尚は頭を強く振って、

「今、君臣共に人質を今川氏に出し置きながら、弓矢とる身がいやしくも人質をすて約を変じたならば、今後は何事に於ても人は信じませぬぞ」

憤然と色を変じ席を蹴ってその場をあらあらしく去ってしまつたが、その後は上野城に籠って病と称して岡崎城へ出仕もせぬようになってしまった。

当時元康の妻子を初め家臣の妻子も多数未だ駿府城や吉田城に人質として留め置かれていたのであった。今川氏と断て

ば、当然人質は斬られるおそれが十分あったにもかかわらず、遙かなる将来を見通して、その危険をかえり見ずあえて信長と結んだのは、元康は凡将ではなかったといえよう。

今川氏と好を断つ以上は、その勢力を三河から駆逐する必要があった。

ところが東三河方面は、今川氏が多年にわたって勢力を扶植することに努めたので、土着の諸豪族は大半その支配下にあったし、これを征するには再起したばかりの元康の力としては到底無理であった。それ故、三河の旧領の地盤を固めるためにも南下して先ず幡豆郡東条の吉良義昭を攻めた。

吉色は足利氏の一門で、三河きっての名族であり有力な豪族であった。酒井正親、本多広孝等が兵を率いて攻め落城すると、義昭は岡崎へ召し寄せられ、城は鳥井元忠、松平信一が守ることとなった。

別に西尾城の牧野成定を攻めて、牧野を牛久保城に追いやると、酒井正親に城を与えた。次いで二連木ニレンギの戸田氏、野田の菅沼氏、作手ツラテの奥平を服し、更に中島の板倉、秦梨の栗生、長沢の糟局を攻めてその城を奪った。

かうして自力を以って自己の運命を開拓し初めた元康は、東三河の一部の今川氏の勢力を除いて、その他の勢力を一掃することに成功し諸豪も大半帰伏して後顧の憂いがなくなる

と、今川方の三河に置ける重要な拠点たる吉田城を攻める準備として、小坂井手窪辺に砦を築き初めた。

かくて永祿五年の初め久松佐渡守俊勝、松井左近将監忠次に命じて氏真の将鶴殿長照の守備していた西郡城を攻めたのである。この長照は義元の妹の嫁した鶴殿長持の子であるから氏真の従兄弟の間柄であった。

落城後、長照の二子を擒としたので、石川伯耆守数正のはからいで、これと当時駿府に人質として残っていた元康の妻と嫡子竹千代（三郎信康）を交換することに成功したのであった。

城を落されたのみか人質までうまうまと奪還されたことを憤激した氏真は、吉田城主、小原肥前守鎮実に命じて、吉田城にあった岡崎の人質十一人を城下竜念寺前に引き出して、串刺による惨虐を敢てしたのであった。

更に、元康の妻の父、関口刑部少輔が石川数正に協力したという廉カレで、関口を自害せしめて鬱憤を晴らしたと云われている。

酒井将監忠尚がおそれていた人質処刑が早くも現実となつて来たのであった。

元康としては、もはや氏真の怒りなどを考えている時期ではなかった。

永祿六年三月には、信長の娘を嫡子竹千代（信康）に娶る約束が出来ていたし、今や公然と氏真に対して叛旗を翻し初めた元康は、将来へ向って力強い独自の道を歩むことを意味して、義元から与えられた元康の名をすて家康と名乗ったのは、廿二才のその年の七月六日のことであつた。

ところが家康と改名した翌々月の九月、はからずも三河の一向宗徒が、従来の慣例を犯されたことを憤って領内に一向一揆の宗乱が蜂の巣を叩いた如くまき起り、ほとんど席の暖まる暇もないほど、西に東に戦っている家康の新しい人生の発足に際して、更に深刻なる試練を受けることとなつた。

その一揆も一向宗徒や農民のみではなく、本多正信等のような譜代の家臣郎党等も信仰の名のもとに、戈を倒さにしてあえて主家に反抗し、血で血を洗うが如き激烈な君臣衝突の

要法の公康家

徳川家康公の三百五十回忌法要が、去る四月二十日、京都知恩院で営まれ、翌二十一日には東京の宝田正道氏が、家康公の信仰について華頂会館で講演をされた。また東京では四月三十日に増上寺で営まれ、武将にしてかつ信仰家の家康公にふさわしい法要であつた。

惨劇となつたのである。

又も運命は、家康に背をむけ初めたのか。門徒一揆を下手に断を下すと、自滅のおそれが十分あり、さりとて妥協もゆるされない。今や一揆との対決に追い迫められた家康は、三河統一の宿望が一頓挫するばかりでなく、一步誤ると、家康の前途を完全に葬らしめるおそれのあるほど底力を有していたのであつた。

従来、関ヶ原合戦はいわゆる天下分け目の戦であり、姉川、味方ヶ原、長篠の三役は小牧役と合せて徳川の四大戦と称せられて、家康と危急存亡の戦と云われているが、或はそれ以上に家康の運命にとって意義があり、最大の危機と云ふべきはこの一向宗乱で、家康の第一の天下分け目の戦であるといわれているほどである。

業界一の銅瓦葺専門店 広告の責任重し
何代も研究せる卓越せる技術は他所の出
来ざる価値ある技量と優美頑強安価を誇
る赫々たる定評ある当方へ。建設者請負
業者も他所の倍以上保つと他の広告に迷
わず遠方でも是非とも設計相談乞無料

東京都文京区
春日1丁目9の28

銅瓦葺協会
相談役顧問
設計及監督
石黒工業

電 (812) 1 5 5 1

隆寛の活躍と位置

鈴木成元

（大正大学講師）

人間は人によって顔かたちが異なるように、それぞれの性格は皆違っている。いや兄弟であつても性格が違っているのが現状である。法然には数多くの門弟達があつたが、それらの弟子達の性格はさまざまであるから、教義の理解上に相違があらわれてくるのは当然である。まして法然は、年代により人によって説教も異なり、その上特別な後継者も定めなかつたのであるから、法然入寂後の弟子にしてみれば、自分の頭にある教義こそが本当の浄土の宗義であると思つていたであらうし、後継者であると思つていたに相違ない。南都北嶺からの圧迫も理由の一つには相違ないが、各自がいだいた自負とその布教が、入寂後間もなく分れる分派の大きな原因になつたことはいふまでもない。

法然在世時代から事実上の後継者となつて門下の指導的地位

にあつたのは信空である。彼は藤原一門の強力なバックに支えられ、おだやかな性格も手伝つて上手に難関を切りぬけた人であるが、同じ藤原一門の出でも隆寛は全く反対の立場をとり、他宗に対して堂々と自分の意見を主張した。

法然と隆寛との結びつきは明らかでない。隆寛は藤原資隆の子として生れ、叡山に登つて伯父の皇円に師事して修行をし、建久三年（一一九二）の冬には根本中堂の安居の結願導師をつとめるまでになつていた。しかし、元久元年（一一九四）には法然から『選択集』を授与されているので、これ以前であることは明らかである。それにしても史実の上で彼の活躍が目立つのは建暦二年（一一三三）信空や聖覚（せいかく）とともに法然の中陰の導師をつとめたときにはじまる。

これ以後になると隆寛ははっきりとした見解をもち、『一

念他念分別事』『自力他力分別事』『具三心義』『極樂浄土宗義』『散善義問答』などの著述をし、また承久三年（一二三二）には但州の雅成親王に対し宗義に関する三カ条の答をすることのように、活発な行動を起すようになる。隆寛は自分が法然の後継者であるとはどこにもいってない。しかし彼の行動



京都長楽寺への山道

にはそういう要素が多分に含まれている。昨年、東寺宝菩提院文献整理途上に、梶田良法博士によって復元された彼の『知恩講私記』『別時念仏講私記』はそれをよく物語るものである。

専修念仏禁断のもとにあった隆寛は『別時念仏講私記』を

つくり、この講式にのっとって別時念仏の興行を行ったのであろう。講衆の結集をすすめて迫害に対抗し、真先に立って布教につとめていたことを物語るものである。このころ念仏の興行を行ったのは何も隆寛ばかりではない。建保五年（一二三三）二月二十九日、空阿弥陀仏は九条の大宮相国堂に多くの念仏徒を集めて四十八日の念仏を始めたが、衆徒が押し寄せてくるといふ情報を聞いて退散し、その後、天王寺を中心に専修念仏の興行を行っていたが、嘉祿元年（一二三〇）四月、頼実の招請で入洛し専修念仏を行った。そこで山徒の訴訟にない関外に追い出される結果になった。その後はまた天王寺に帰り興行をしていたという。一方、幸西は弟子明信・薩生など一念義を唱え、証空も盛んに教義の布教に専心し、その弟子観明・証仏・顕性など第一線に立って活躍した。その他の人々も内面的な布教活動をおこしたことはいうまでもないが、隆寛の積極的な行動には遠く及ばない。

『知恩講私記』は最古の法然伝記といってもよい。これは出家など五つに分けて法然の徳を讃えた講式であり、法然滅後間もなく隆寛系の門徒によって興行されていた事実がわかる。師匠の追善供養をするのは珍らしいことではないが、講式まで作って讃嘆するのは格別である。そこには法然に対する並々ならぬ追慕の情がみられるが、それよりも、これを行

知恩講私記

先二礼

次表白

敬白云重壽佛觀、智王念佛三昧、諸
聖重壽而喜西方極樂、教者互而惠世、
也南無弥陀行者衆生、往之要路也、
上人知此及勸、此行道術、由來、
風俗之作、處處于新、此化事、在、
跡或、思、
謝、
德、
勢、
第一、
人、
地、
切、
此、
何、
與、

知恩講私記〔東寺藏〕

うことによ
って講衆す
なわち門下
の団結を計
った隆寛の
力量は高く
評価しなけ
ればならな
い。このよ
うなものが
やがて知恩
院の御忌に
まで発展す
るからであ
る。現在で
は御忌とい
うのが普通
であるが、
形としては
知恩が古い
ことはいう

までもない。

このようなことがあってか念仏教団はかなり発展した。もちろんこの中には確かに反社会的な行動に出たものもあったことはいうまでもない。そしてそれを口実に叡山や興福寺では圧迫を重ねたのであるが、念仏教団の勢力増長をねたむ気持があったことは見逃がせない。朝廷では承久元年（一二三〇）閏二月、元仁元年（一二三二）八月の二回、専修念仏禁止の令を出した。このときさらに大事件が起った。そのきっかけが隆寛にあったのである。並棟の定照は念仏の流布をねたみ『彈選採』を書いて隆寛のもとに送ってきた。これを読んだ隆寛は早速『顯選採』を書いて定照の説にするべく反撥した。そこで腹を立てた定照は叡山に訴え、山徒の蜂起をすすめる朝廷に訴えられることになったのである。

安貞元年（一二三〇）六月、山徒は東山大谷を襲って御廟を破却し『選採集』の版木を焼いた。さらに翌七月には隆寛・幸西・空阿弥陀仏の三人が京都を追放され流罪になった。この事件をみても隆寛の位置がわろう。定照が『彈選採』を隆寛に送ったのは、隆寛がそのような位置にあったことが対外的に認められていたからであろう。しかし、それを堂々と受けて立った隆寛の態度は実に立派であったといわなければならない。もちろん墳墓の破却や版木の焼失は隆寛の態度によ

ったものとはかりはいわれぬ。当然そうなりそうなどころにもってきて、さらに刺戟を与えた結果にはかならない。

名門の貴族に生れた隆寛は三男であつただけに、当時の風習通り登黻した。そして鋭利な頭脳と能弁は将来を期待された。しかし法然に師事して安住の地をみつけた隆寛は、専修念仏にぼつとうし、法然入寂後は自分こそ法然の後継者であるという心境になつていたのであろう。そんなわけで、危険を承知の上で真先に行動を起し、著述をし、論義を張り、弟子の育成につとめたのである。法然入寂後事実上の後継者であつた信空は流罪にならなかつたし、リストに載つていた証空は誓紙を書いて朝廷に出し、九条良快も証空が慈円の帰依をうけ臨終の善知識となつた証拠を弁明して流罪にならなかつた。けれども隆寛は流罪に甘んじ、安貞元年十二月、相模の飯山で入寂した。

隆寛が関東に下る以前から関東にはかなりの念仏者がいたが、彼の流罪はさらに一層の刺戟を与えたことであらう。やがて盛り上る東国浄土教の上に忘れることはできない。しかし浄土宗における隆寛の位置は低い。真宗では法然—隆寛—親鸞と連なる高い位置に立っている。これには従来からいろいろな考え方があつたことであらうが、このような活潑な行動をした隆寛をみると、浄土宗の隆寛を遇する態度はい

かにも不自然であるといえる。なるほど、鎮西義を正統とする浄土宗の教義からすれば、隆寛の称える多念義には賛成できない面もあることであらう。けれども、浄土教流布という歴史的立場に立つとき、もっと冷静に現実を評価しなければならぬであらう。

立場によつて人間の評価はさまざまに変わる。聖光にも信空にも証空にもそれぞれ独自の価値があるが、何といつても偏依法然の人間くさは隆寛が最も強いと私は思っている。彼の功績を忘れたらとんでもないことになる。



隆寛に選択集を授く〔勅伝〕

創価学会手引

久々に数字を誇示した学会

創価学会が、最近、一向に教字を示さなくなつた事に対し、且つて此の誌上で秘密主義への下向として、危険視したことがあつた。

この傾向は、今日でも変化は無いのであるが、最近、池田会長就任五周年記念講演会席上（昭和四十年五月三日）、久々に会長の口から、これが発表された。再び秘密主義を取るに違いないと考えられるので、この際、紹介しておこう。勿論、この数字を正直に信ずる必要はなく、又驚くこともない。しかし、警戒は必要である。いずれは、近づいて来た参議院選挙のデモンストレーションと見てよいであろう。

主な数字を紹介してみると、次の通りである。

全会員数	五百四十万世帯
男子青年	十五万八千人
女子青年	十一万九千人

学生部	七万一千人
支部数	千二百十支部
男子部隊数	千四百二十四個
女子部隊数	千三百一個
海外世帯数	五万世帯
教学部員	八十五万二千八百八十六人
全寺院数	二百四十六ヶ寺
僧侶	千名

此の中で、特に注目される事は、学生部の数が、最近急激に増加していることである。これには、勿論、大学生ばかりでないのであるが、こうした学生を吸収することは、学会が、知識階級を、いかに取り入れようかと苦勞していることを、よく示している。勿論、逆にこの成長には、批判思想の進出も予想される為、危険が無いではない。反面、無批判な独善的学生の誕生は、日本の将来に大きな禍根となることにも、注意せねばならない。

次に注目される事は、寺院数の増加と、それに伴う僧侶の増加である。五年前までは百八十八ヶ寺、三百九十一名であつたと、池田会長は言っている。この急増は、会員の増加に伴う必要もさる事ながら、既成仏教への積極的切り崩し作戦として、油断のならぬことである。僧侶数の三倍近い増加は、僧侶養成による成果であるが、既成仏教の反省が必要である。

ともかく学会は、今や全組織をあげて気狂いの様に、選挙運動を始めている。聖教新聞は、すっかり選挙新聞となつてしまった。この調子で行くと相等な成績を残しそうである。宗教の美名にかくれた、あくどい選挙運動を、見通している今の法律も、どうかと思うが、それ以上に日本の将来が危険である。

勿論、今度の参院選で成果を収めたとしても、それが、どこまでもそのまま延びて行くとは考えられない。最近の批判は、この点を鋭く突き始めている。ただ、政界や、宗教界が、本来の目的を忘れて、泥試合ばかりしていると、その間隙をぬって、拡がって行くことを、この際、注意しておき度い。

編集後記

○今月の巻頭は、慶応義塾大学教授であり、テレビ、ラジオで皆様よく御存知の奥野信太郎先生の幸福を求むる心、これは、大正大学の水曜講演会における先生のお話しを掲載させていたかったです。

○日本浄土教物語の連載は鈴木成元先生が、非常に熱心に書いて下さっております。又、御感想等ありましたら、編集部宛御送り下さい。

○ロスアンゼルス浄土宗別院の野崎靈海氏が、団参を連れ来日中であるが、七月迄御滞在とか、又、雑誌浄土にも玉稿を賜りたいと思っております。

○本年の御忌会には、大正大学の浄宗会が、知恩院と

増上寺に伝道隊を出し、若い熱のあるところを示し、歓迎されたそうです。

○先般編集会議で、本年は浄土発刊三十周年に当る所で、秋には特集号と講演会を計画中です。それにしても三十年間発刊出来たことは、諸先輩の努力と共に愛読者の皆様の御蔭と深く感謝申し上げます。

○雑誌浄土の前編集長、村瀬秀雄氏は、長谷川良信学長の千葉の淑徳大学で会計課長として御活躍中です。本年より四年生の福祉大学として発足した大学であり、大学に泊り込んで学校行政に専心されております。

○大正大学教授中村康隆先生の御自坊、清水市の実相寺では、今春鐘樓が完成し過日落慶式があり、権見行列等があつて、盛大に行なわれました。

○浄土同人の竹中信常先生は、御自坊の檀信徒を連れ今春九州方面に御旅行になりました。先生は、なかなか檀信徒教化にも熱心であられます。

○安井香山先生が今春大正大学の助教授に就任されたことは皆様御存知のことと思いますが、この御祝いを大正大学の若手の先生方で六月初旬、熱海で行なうそうです。

○浄土編集部は、現在、腸の手術のため入院中の水谷氏と、当間寿海君が、今春より鎌倉の御成小学校の先生に就職のため去つたので宮林編集長以下、残ったスタッフで努力していますが、今度、当間君の替りに、大正大学の大学院在学中の長谷川宣丈君に御手伝願うことになりました。当間君同様宜しく御願ひ致します。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年五月二十五日 印刷

昭和四十年六月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

発行所 法然上人顕仰会

東京都千代田区根田町一ノ二

電話東京二六二局五九四番
振替東京八二一八七番

三大学仏跡参拝研修団募集

○旅程 東京↓カルカッタ↓ブッダガヤ↓ナランダー↓カトマン
ドゥ↓ベナレス↓ルンビニー↓クシナガル↓アグラ

↓デソール↓バンコック・香港↓台北↓沖縄

○日程 昭和四十年十一月三十日～十二月十八日

○経費 三十四万五千円

○参加者 大正、立正、駒沢大学々生及一般希望者三十名

○企画者 飯野川崎トラベル株式会社

○協賛 大正、立正、駒沢三大学

○申込先 大正大学学生課

東京都豊島区西巣鴨四丁目

○申込締切 九月十五日



梵鐘のトップメーカー
日本一の技術と伝統

梵鐘その他銅合金

記念・贈答用美術鋳物調整承

池上本門寺大鐘・香取正彦作



昭和三十九年九月 謹鋳

口径一・六メートル重量七トン

老 子 の 鐘

文政彫刻技術指導
梵鐘界の権威

香取正彦先生

音楽響指士

青木一郎先生

鋳物師

老子次右工門

株式会社 所 製 老 子 會 社

本社 富山県高岡市横田511 電話② 0258
大阪連絡所 大阪市北区曽根崎上1-1 電話 (341) 8847
大阪支店は電電公社の接続のため上記に連絡所を開設しました御利用願います